五日市線開通90周年

五鉄からの変遷を振り返る

1925年（大正14）年4月に私鉄「五日市鉄道」として開業し、現在秋川流域の住民や観光客らに親しまれているJR五日市線が今年、開通90周年を迎える。大正時代は第一次世界大戦の影響による未曾有の大戦景気（大正バブル）、数年後には戦後恐慌による不景気へと状況が一転する波乱の時代だった。同鉄道も好景気を背景に建設計画が進められ、不景気による資金難など紆余曲折の末に開通した。この特集では五鉄の歴史とともに、五鉄開業に尽力した人々や伝説の名医・海老澤峰章（えびさわほうしょう）氏など郷土の偉人が活躍した時代を五鉄の歴史とともに紹介したい。

五鉄の歴史

◆**鉄道のなかった時代**　明治時代から五日市から甲武鉄道（現中央線、1889年開通）という方法をとっていた。駅まで行くのはもちろん、徒歩や人力車・馬車であった。

同鉄道のできる前、五日市地域の住人たちは上京するのに八王子まで、894年開通）に乗る

◆**五日市にも鉄道を！岸・小机コンビ登場**　五日市地域では電気、鉄道、バス、水道、電話などの近代施設が全て大正時代に開設された。秋川水力電気会社などそのいくつかに〝政治力と実行力〟を持つ岸忠左衛門氏と、代々の山林業による〝経済力と信用力〟を備えた小机三造氏が関わっている。

もともと現在の東大和市に生まれ、叔母の嫁ぎ先である五日市の「寿美屋」に養子に入った岸氏は西多摩郡会議員、五日市町長などを歴任。郡会の会議のたびに青梅まで山道を通い、鉄道開通など近代化を進める青梅の姿に「五日市も」と考えるようになったという。

五日市鉄道の実質的な推進役を務めた両者は、檜原村から東秋留村までの有力者を発起人に巻き込み、青梅鉄道にならい大久野の石灰石を活用し浅野セメントへの未払いが続出。その

◆**不景気、関東大震災**　資金集めは、西秋留村の代議士・瀬沼伊兵衛氏の協力や地域の盛り上がりもあり、募集の2万株を超える申し込みがある好発進となった。しかし、現実に払い込みが開始されると好景気から一転した不景気風に、当分の間は配当もない鉄道事業に株主もほぼ重複している秋川水力電気会社の資入れも行われた。

こうした苦難が続く中で、横浜に届いたドイツ製機関車が関東大震災の2日前に拝島駅に格納され、被災を免れたことは数少ない朗報だった。

◆**五鉄、開通へ**　多くの苦境を打開しながら、浅野セメントの工場誘致・資金の融資も得て1925年4月20日に五日市鉄道の開通式が盛大に行われた。まず五日市（現武蔵五日市駅）、増戸（現武蔵増戸駅）、西秋留（現秋川駅）、東秋留、拝島駅まで、半年後に大久野までを結ぶ約13キロメートル、一日6往復の運行でのスタートだった。

あきる野市油平の福徳禅寺（奥田文敬住職）には瀬沼伊兵衛氏の墓が残る

◆**太平洋戦争、国鉄へ**　開通の10年後に、「郷土近代化の父」と称えられた岸氏も死去し、その後、同鉄道は立川で南武線に連結することを目的に青梅線とは別に拝島―立川間を延伸（1944年廃線）、多摩川原の砂利運搬専用線として武蔵日田中―拝島多摩川間開通など路線を延ばした。しかし、政府の企業統合政策に基づき、1940年浅野セメント資本下の南武鉄道に吸収合併、その3年後、戦争末期の国家総力戦体制化への流れの中、南武線・青梅線とともに国有化された。

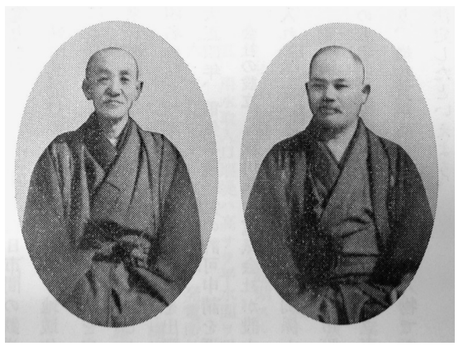
企業形態は変わりつつも戦争の影響はなかった五日市線だったが、1945年7月28日12時16分発の拝島発武蔵五日市行きの三両編成の列車が、多摩川の鉄橋近辺で突然飛来した米軍のP51ムスタング2機から、蒸気機関車と一両目客車が機銃掃射を受けた。死者3人と重軽傷者16人という惨事となったが、8月2日、13日にも熊川駅付近が爆撃され死者1人を出した。駅舎と鉄道用地に被害はなかったという。

その日、沿線各駅では花火が打ち上げられ、中でも五日市では千発もの花火を朝から夜まで休みなく上げ、余興や芝居、お囃子、踊りも行い町をあげて鉄道の開通を喜んだ。汽車にただで乗れるということから沿線はお祭り騒ぎで、無蓋の10トン貨車に多くの人が乗り五日市―拝島間を往復したという。

しかし、その晴れの場に、小机氏の姿はなかった。もともと体が丈夫な方ではなかった小机氏は、前年の4月に脳溢血で突然倒れ死去したからだった。

〈略年表〉

1880（明13）	五日市村、五日市町に
1889（明22）	甲武鉄道（現中央線）開通
1894（明27）	青梅線開通。日清戦争
1895（明28）	五日市乗合馬車運行
1904（明37）	日露戦争
1914（大03）	歌人三ケ島葭子、西多摩郡小宮尋常高等小学校退職 第一次世界大戦勃発
1915（大04）	大戦景気で日本好況
1916（大05）	秋川水力電気会社創立
1918（大07）	海老澤峰章死去。五日市郵便局、電話交換始める
1921（大10）	五日市鉄道㈱創立。農村恐慌到来（養蚕農家打撃）
1922（大11）	五鉄、工事着手。萩原タケ、ナイチンゲール賞
1923（大12）	青梅線電化。関東大震災
1924（大13）	小机三造死去
1925（大14）	五鉄開通、約半年後大久野の武蔵岩井駅まで延伸。阿伎留病院設立
1927（昭02）	金融恐慌勃発
1930（昭05）	病院前停留場開業（後の武蔵引田駅）、立川駅―拝島駅間延伸
1931（昭06）	熊川停留場開業 八高線開通
1935（昭10）	岸忠左衛門死去
1936（昭11）	内山安兵衛死去。萩原タケ死去。2・26事件
1941（昭16）	五鉄、南武鉄道と合併 太平洋戦争勃発
1944（昭19）	五鉄国有化
1945（昭20）	五日市線、多摩川鉄橋で米軍飛行機から機銃掃射、熊川駅付近爆撃2回。太平洋戦争終戦
1961（昭36）	国鉄五日市線、電化
1982（昭57）	貨物支線大久野―五日市間が廃止、立川―武蔵五日市の貨物営業停止
1987（昭62）	西秋留駅が秋川駅に。JR東日本五日市線へ



『五日市町史』でも紹介されている岸忠左衛門氏（右）と小机三造氏（左）

あきる野市五日市の青木健治さん所有の法被。表には「五日市鉄道株式会社」と「建築工手長」。裏には五鉄のマークも。現存する貴重な資料となる。

▲五日市線0キロポスト（拝島駅1番線）

今も残る五鉄の跡

五日市鉄道の線路跡は、今も各地に残る。日の出町大久野には武蔵岩井駅ホーム跡。また、拝島駅南口から徒歩3分ほどの駐輪場（昭島市松原町）には、拝島～立川駅間の線路跡「五鉄通り」の看板が掲げられている。

昭島編

昭島市大神町には「大神駅跡」が残る

▲拝島駅南口の駐輪場に残る五鉄通り

◀五鉄跡の説明板も

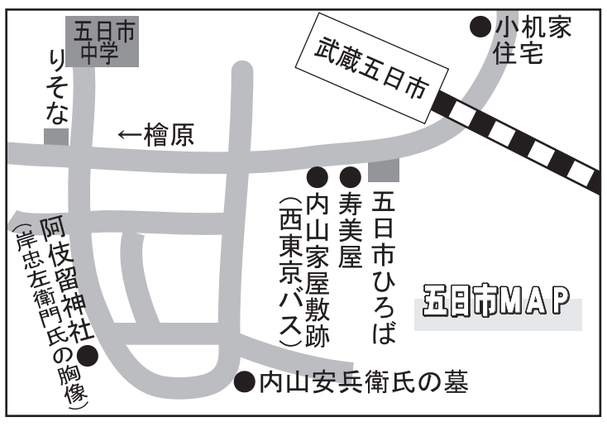
武蔵五日市駅近くの小机坂に鉄道の柵跡が残る ▶

日の出編

▶1982年に廃線となった岩井支線の終点「武蔵岩井駅」跡。残されたホームが太平洋マテリアル西多摩工場の駐輪場として残されている。

同支線のもうひとつの駅「大久野駅」は現在公園となり、町民の憩いの場となっている。

五鉄創業の功労者
五日市に残るゆかりの地



小机三造氏の生家〈小机家住宅〉

武蔵五日市駅から秋川街道を日の出方面に進み、小机坂を上った左手に、都指定有形文化財の小机家住宅が見える。

当時の第7代当主小机三左衛門が、明治の文明開化の洋風建築に刺激され、1875（明治8）年ごろに建築。木造2階建て、土蔵造りの建物の南側には、ローマン・ドーリア式円柱を付けた列柱廊と両開窓が並ぶ。

五日市鉄道の創業に尽力した8代目当主の小机三造氏も、この家で育ったという。「曽祖父の話は、祖父から聞きました」と、11代目当主の小机篤さん（66）。

現在、毎週金曜～月曜に小机邸喫茶室「安居（あんご）」を夫妻で開業中。「手作りのケーキは、妻のレシピで私が焼いています。二人三脚ですね」とほほ笑む小机さん。

サクラやクチナシ、モミジ、マツと四季折々の花木が植えられた庭と洋館を眺めた後に、抹茶やコーヒー、紅茶などが味わえる。

明治初期に建てられた小机邸と小机篤さん

和洋折衷様式の邸宅内を見学できる

【小机家住宅】◇あきる野市三内490　武蔵五日市駅徒歩10分　☎042・596・4158（喫茶室「安居（あんご）」は午前11時～午後5時30分　金曜～月曜のみ営業・年末年始休み・臨時休業あり）

岸忠左衛門氏晩年の住居〈寿美屋〉

あきる野市五日市の　を過ごした住宅が残っている。1926（昭和　）年に立てられた日本家屋は、江戸時代から続く、麺類製造元「寿美屋（すみや）」（岸忠史社長）が経営するそばと和食の店「寿庵」として活用

檜原街道沿いに、岸忠　ている。1926（昭和　元）年に立てられた日

阿伎留神社境内には胸像がある

忠左衛門氏の胸像

同店隣の五日市ひろば（西東京バス）

忠左衛門のひ孫にあたる岸社長は、1995年に食事処を開くときに、「曽祖父の名を残したい」と店名にその名を使うことにした。

岸社長は忠左衛門について「豪放磊落でありながら、謹言実直さも併せ持った人」と伝え聞いているといい、「曽祖父も最初はいやいや叔母の嫁ぎ先に養子に入ったようですが、内山安兵衛さんにかわいがられ、小机三造さんなど仲間もでき五日市を良くしようと考えるようになったようです。外から来た人間だったからこそ、思い切ったことができたのかもしれませんね」と笑顔で話した。

同店では忠左衛門が夜中の2時に起きて作っていたという「寒そうめん」などを現在も販売。イベントでは「五鉄やきそば」の提供も行っている。

◇【寿美屋】あきる野市五日市64　☎042・596・0018

炭問屋だった寿美屋は、冬にそうめん作りもしていた

初代五鉄社長 内山安兵衛氏ゆかりの地

内山家は幕末に名字帯刀を許され、五日市有数の富裕者として知られていた。一度公職を離れ、湘南逗子の別荘に移った安兵衛だったが忠左衛門らから出馬を請われ、代議士となり地元の発展に尽力した。また、キリスト教徒としても知られており、洗礼を受けた秋川渓谷に「耶蘇淵」という地名が残っている。

▶屋敷跡は西東京バスの整備工場に

▲ブロンズの十字架の安兵衛の墓